

平成 30 年 6 月 28 日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04136

研究課題名(和文) 社会的条件不利地域の母子支援活動実践と連携した心理学的介入

研究課題名(英文) Psychological Interventions collaborated with helping practices for mothers and children in socially challenged regions

研究代表者

弘田 洋二 (Yoji, Hirota)

大阪市立大学・大学院創造都市研究科・教授

研究者番号：60285278

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：大阪市西成区において1970年代より地域における子育て支援実践を継続し、近年地域包括的な機能をもつに至っている非営利特定法人「こどもの里」を連携拠点として、地域における包括的支援の実態を調査した。放課後児童保育、および地域特性を踏まえたエンパワメント・プログラム、ファミリーホームの運営、自立援助ホームの開設と運営などの定点観察をとおして調査課題を発見することができた。こどもの保育、養護において政策的に推奨されている家庭的な要素について、公的な施設、民間の同種の施設を比較することによって検討することができた。韓国、台湾の施設を訪問調査し、地域ベースの草の根型の活動において重要な要素を抽出した。

研究成果の概要(英文)：We were having continuous observations about practices of helping for the rights of the child and their mothers which had started from 1970's. "KODOMONO SATO(Place of Origin of Children)" located at NISHINARI district in Osaka is activating the comprehensive regional supports for children, so it has provided multi-functions both for the children and their mother. We could get our plans for the researches by observing them. Although Japanese government was recommending every provider to construct familiar relationships with the children it takes care of, it is not so clear how is the familiarity. Several institutes for child care were compared and analysed from our viewpoints. Characteristics of community based comprehensive supports were abstracted.

研究分野：臨床心理学

キーワード：こどもの発達保障 地域包括支援 草の根型活動 地域ネットワーク 家庭的なもの 専門性

1. 研究開始当初の背景

2015年まで大阪府下の認定NPO組織のなかで心理臨床の専門性へのニーズの様態を調査・分析(2009-2011) 学校を拠点としたメンタルヘルス対応の現状に関する日米比較調査(2012-2013)を行う中で、大阪市西成区の「こども里」を中心とした子育て支援の地域ネットワークに注目していた。

子どもの健康な成長と学習条件を整えて学習権を保障するために、特に貧困や社会的な偏見にさらされる地域の子どもたちには直別な配慮が必要であることは、その地域のネットワーク活動をとおしても確認されていた。

大阪市の中でも、西成区における「子育て支援・虐待防止地域連絡協議会」の活動は優れて活発であり、多職種の連携が実現していた。「地域包括支援」のモデルとして、「こどもの里」の活動実践を観察しながら他の地域、他の国々のグッドプラクティスと比較検討することが有意義だと想われた。

西成区の「こどもの里」は、「子どもの家」事業を中核に、里親委託、小規模住宅型擁護養育、緊急難的な宿泊などの機能を実際に担っており、その活動と運営をとおして今後のコミュニティーベースの健康、福祉プロバイダーの開発について考えていくひとつのモデルケースとしての価値があるのは間違いない。それら活動は、当初より地域における活動展開の中で一定の事情をもった人々のニーズにその都度対応するという実践努力によって拡大して今日の形をなすに至っている。福祉、医療にかかわる活動でありながら、既存の医療機関、福祉施設におけるルーティン化されたサービス以外の、いわば alternative(「隙間」)サービスを開拓するものであった。その過程において利用者や援助実践者の心理および関係理解が必要とされるサービスであり、少なくとも日本における臨床心理学の対象領域に収まりきらない経験領域であった。

連携する「東アジア都市における包摂型居住福祉実践に関する研究」(基盤B:代表 全泓奎)の調査の中で、台湾と韓国グッドプラクティスに関して調査準備が整っていた。

2. 研究の目的

衰退する地域コミュニティーの再生の試みはいたるところで行われてきたが、成功しやすい要因のひとつとして「子ども」のこと

を中心に据えるということがあった。学校・保育所など教育施設、医療・福祉の専門機関において発見される課題と、地域内での多くの家庭の生活に寄り添った関係の中で抽出される問題には、その背景理解や対応をめぐる相異が生じていた。地域実践活動を詳細に観察することにより、専門的援助としての臨床心理に携わる観点からは見落とされがちな問題を抽出して問題提起することであった。

具体的には、草の根型の地域コミュニティーにおける子どもの発達保障の実践を調査して、その特徴と問題点を抽出することである。

3. 研究の方法

1) 西成区の「こどもの里」で展開されている地域包括支援をグッドプラクティスとして、各事業を観察し、その特徴と意義を抽出すること。

2) 包括支援として近年注目されている「自立援助ホーム」の運営実態を調査すること。

3) 海外のグッドプラクティス、特徴ある「草の根型」の地域ベースの子どもを対象とした支援実践を探ること。

以上を探りながら、支援者と利用者間の関係のありかたについてその特徴を探り、専門的センター型の支援関係と比較する。

4. 研究成果

1) 子どもの養護において「家庭的なもの」を、家族内ではなく地域内で実現するには、子どもをエンパワーする価値伝達が必須だと思われた。そのためには、機関と地域との交流関係も重要であることが確認された。

2) 厚生労働省の示している「家庭的」という理念には、その機能が明確にされていない。家族は、定義上性欲動にもとづく生殖活動の結果できる集団であるが、家庭はその成員が関係を展開する場である。家族主義的という言葉が、排他的で父権的な上下関係にもとづいて他者の所有を志向する姿勢をさすのに対して、家庭的とは家族間の相互主観的交流を尊重する姿勢を表すものとして使用されているというようには思えるが、はたしてどうだろうか。当然そこに情愛に基づくやさしさ、慈しみというものがあるにせよ、情愛は基本的に欲望と結びつきやすく、安心とは程遠い興奮をもたらすことがあり、家庭的という要件に親子関係を模した情愛的要素のみを求めるとすれば危険であり、容易に家族主義と混同

されてしまうであろう。「こどもの里」の実践からその要素を抽出した。

3) 公的な施設、大規模な養護施設を観察しながら感じることは、規則および禁止行為の伝達以外の掲示物が少なく、画一性が求まっていることである。こども里が、そのはじまりからキリスト教徒のつながりがあることも関連するが、施設では何を大切にしているかが明示的に示されていることである。ホームレスのひとのための「こども夜回り」の実践に代表されるように、掲示図書や、ニュースなどもこどもの社会関心を育て、弱者の権利を伝達していることである。地域で行われる「権利教育」と連動するものであるが、一律な行動制限によって管理的色彩を強める養護・保護との違いが明確である。家庭とは、本来が自分を大事にすることをはじめとする価値伝達の場であることが想起される。

4) 今回の調査対象は、路上生活者をはじめ安全な空間に暮らすことを阻まれた女性、そしてそのような状況の中でメンタルヘルスの失調につながる行動、生活習慣を形成した人々の矯正施設、さらに施設収容においては進みにくい生活自立を目的とした居住福祉の取り組みであった。そのような福祉実践を行う組織と社会政策の連携に日本と比較して先進性のあるソウル市の事例を分析的に理解する目的であり、そのなかに条件不利をもって生きる対象として高齢者や子どものケアの実態調査も今回含まれた。ひとつは、朝鮮戦争による戦災孤児の養護に端を発して設立された施設が福祉施策の変遷に応じて支援対象、支援重点、支援体制を変化させて今に至っている事例(2017年3月)、もうひとつは、戦前の独裁体制の中で放置された貧民地域に対する支援住民運動の一環であり、そのなかで貧民地区の子どもたちの学習保障をめざすコンバン運動にルーツをもつ組織の事例(2018年1月)である。これら二事例の対比は、国家あるいは都市政府の政策に基づいて作られていく支援と草の根型市民活動にルーツをもつ支援の異同を明らかにする点で注目すべきものがある。

公的資金を受けて運営される地域の子ども

たちを対象とした機関の運営、プログラムと「草の根型」の活動団体のそれを比較したところ、専門家の配置、専門治療的な体制は前者が圧倒的に優位であった。

5) 台湾の社会的条件不利地に設置された子どもの学習支援施設は、社会的企業の成功モデルとして著名な機関であったが、子どもの母親を地域食堂、地域特産物の働き手として雇用するなど、家族支援をもはたしていた点で注目された。近年、日本でも「こども食堂」が注目されているが、地域や子どもの家庭を参入させる力が弱く、持続性が懸念される。

6) 子どもの学習、生活、心理発達支援にかかわる人材は、子どもがおかれている環境と歴史に関する認識、社会正義の実現に関する情熱を必要とする。単なる制度的な資格認定を受けたものがかわりの範囲を限定してかわることが受け入れられにくい土壌があった。他方で、虐待や悪条件下で育った子どもたちのやりにくさはあって、専門的な関係マネジメントも求められていた。

持続可能な草の根型のコミュニティベースの子育て支援体制を作るには、専門性と地域性の乖離を解消する手段が必要であることが認識された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

弘田洋二、児童養護において求められる「家庭的なもの」について、居住福祉研究、日本居住福祉学会、査読あり、No.22、2016、30-36

〔学会発表〕(計 1 件)

弘田洋二、日常性の喪失を防ぐ保護のありかたについて、日本居住福祉学会、2016

〔図書〕(計 2 件)

阿久澤麻理子 他、通信制高校のすべて、彩流社、2017、267

全泓奎 他、移民政策のフロンティア、明石書店、2108、58

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

弘田洋二 (HIROTA, Yoji)
大阪市立大学・大学院創造都市研究科・
教授
研究者番号：60285278

(2) 研究分担者

全 泓奎 (JEON, Hongyu)
大阪市立大学・都市研究プラザ・教授
研究者番号：0043613

阿久澤麻理子 (AKUZAWA, Mariko)
大阪市立大学・大学院創造都市研究科・教授
研究者番号：20305692

(3) 研究協力者

()